

職業選択過程における選択時期の重要性

指導教員名： 西村 孝史

氏名 : 林田 佳菜

枚数 : 20 枚

職業選択過程における選択時期の重要性

林田 佳菜

要約

職業選択とは、大学生にとって、その後の社会人生活を定める重要な選択の1つである。就職活動を経て職業を選択する学生や、試験勉強を経て職業に就く学生など、職業選択のプロセスは様々である。本稿では、職業選択を行う時期の違いによって大学4年生を（1）大学入学前に職業を選択した学生（医療・教育系）、（2）就職活動を行った学生、（3）公務員志望の学生、（4）大学院に進学する学生の4つのタイプに分類し、職業選択プロセスについて重点的に半構造化インタビューを実施し定性分析を行った。その結果、職業選択時期に対する満足度や将来の選択肢の数に差が見られた他、やりたいこと探しにおける動機づけ、職業選択不安、キャリアアンカーについて職業選択時期が規定要因の1つとなることが示された。

キーワード：職業選択時期 就職活動 職業選択不安

目次

- I. 問題意識
- II. 既存研究
- III. 調査方法
 - 1. 調査概要
 - 2. インタビュー質問項目
 - 3. アンケート質問項目
 - 4. 職業選択時期の定義
- IV. 発見事実
 - 1. 職業について考える期間の違い
 - 2. 将来の選択肢の数
 - 3. 考えの変化
 - 4. 職業選択時期に対する満足度
 - 5. 職業選択不安
 - 6. キャリアアンカー
- V. 考察・まとめ
- VI. インプリケーション
 - 1. 学術的インプリケーション
 - 2. 実務的インプリケーション
- VIII. 研究の限界
- IX. 参考文献

I. 問題意識

株式会社インテリジェンスが行った 2014 年の調査では、「20 代を仕事中心に過ごしたい」と回答した学生は、男女ともに 6 割を超える。また、30 歳になった時の幸せに必要なことの 1 位として、男女ともに「やりたい仕事をしている」がランクインしている。このことから、学生が近い将来の人生の中で「仕事」をいかに重視しているかが窺える。では、その「仕事」を選択すること、つまり職業選択とはどのようなものなのか。藤井(1999)によると、「Gati(1986)は、職業選択を、実際にその職業に就いて職場で働くまで自分が選択した職業の良否がわからない“最終決定の是非の曖昧な意思決定”」と述べている。この“最終決定の是非の曖昧な意思決定”を大学生の大多数が経験する。

では、大学生はいつから将来の職業について考え始めるのか。株式会社ライセンスアカデミーの 2014 年の調査では就職を意識し始めた時期の回答として、大学在学中が 8 割を超え、大学 3 年生が 1 番多く高校在学中と回答した学生は 1 割程度となっている。つまり、大学生の大多数が就職活動を行う時期に初めて就職を意識始める。しかし、資格取得を目指す学校を個別に集計したところ、高校在学中に意識したと回答した学生の割合は増加し 3 割を超える。

医療系や教育系といった将来の職業との結びつきが強い学部・学科に進学した学生は、高校在学中に行う大学選択が職業選択と直結している。一方、現在の就職活動の時期は、広報活動が卒業・修了年度に入る直前の 3 月 1 日以降、採用選考活動が卒業・修了年度の 6 月 1 日以降とされている(日本経済団体連合会, 2015)。よって、就職活動を経て職業選択を行う学生の多くは、大学 3 年の終わりから大学 4 年にかけて職業選択を行うことを迫られる。また、大学院に進学する学生は最終的に職業を選択する時期は大学院在学中である。文部科学省(2014)の調査によると、公務員試験について、公務員志望の学生は予備校に通って受験する傾向が強く、民間企業の就職活動を始める以前に、予備校に入学し試験勉強を開始する学生が多い。さらに、公務員試験は大学 4 年の 5 月・6 月に実施されるものが多く、これは民間企業の就職活動の採用選考活動の開始と同時期である。よって、公務員試験の勉強と就職活動を両立して行うことは難しい。つまり、公務員志望の学生は民間企業の就職活動開始以前に、職業選択を行っている学生が多いと考えられる。

このように、職業選択を行う時期は学生によって異なる。既存研究では、職業選択において就職活動を前提としている論文が一般的であり、就職活動を行わない学生を対象としている研究は少ない。そこで本稿では、就職活動の有無に関わらず大学 4 年生を対象者とし、職業選択時期の違いに焦点を当ててタイプ分けを行う。タイプごとの比較を行うことで、職業選択時期の違いが規定要因となる事柄について考えていく。

II. 既存研究

下村(1998)は、「何らかの意味で良い職業選択を行おうとするならば、大学生の就職活動ではかなりの数の企業を多くの選択基準で比較検討する膨大な情報処理が必要となる」としている。一般に大学生の就職活動では就職先の候補となる企業や業界の数が多いため、数多くの選択肢から最終的にたった 1 社を決める意思決定が行われる。そこで下村(1998)の研究では、進路選択における決定方略学習の効果を測っている。決定方略は、意思決定を行う際にどのような情報をどのような順序で検討するかを定式化するものが多い。そのため決定方略学習は、「必要最小限の情報を順序だてて検討する方法を 1 人で学習できるような援助方法」として職業選択の意思決定において有効となる。また、就職活動を行う学生は必要な情報をすべて収集することはできないため、情報を取捨選択する必要がある。下村(1996)では、職業選択者の情報探索方略やどのような情報が探索されているのかといった情報探

素内容について、情報モニタリング法を用いて検討している。その結果、就職活動を経験していない大学3年生と就職活動を経験した大学4年生において、その情報探索方略と探索された情報内容の違いが見られた。具体的には、大学3年生では選択肢(自分の就きたい企業)中心の情報探索を行う一方、大学4年生では属性(自分が重視する選択基準)中心の情報探索を行うという結果が得られた。

就職活動のように選択肢が多い意思決定においては、その情報をどのように探索し、どのように意思決定をするかが重要な課題である。では、就職活動を行わずに職業選択を行う学生は、自身の選択肢の中でどのように意思決定を行うのか。また、自身の選択肢を少ないと感じるのだろうか。

職業選択に関する不安についても、これまで数多くの研究がなされてきた。藤井(1999)は、就職不安を「職業決定および就職活動段階において生じる心配や戸惑い、ならびに就職決定後における将来に対する否定的な見通しや絶望感」と定義し、就職不安尺度を作成した。また、松田・永作・新井(2010)は、就職活動そのものに対する不安尺度を作成し、就職活動不安が就職活動の活動量や満足感にどのように関係しているのかを検討している。その結果、就職活動不安が高まると就職活動量、就職活動に対する満足感がともに低くなることが示された。矢崎・斎藤(2014)は、内定獲得後の就職不安について論じている。今日の大学生は、内定を獲得してから入社するまでの期間が長い。そのため、内定を承諾した時には就職に対して意識が高かった学生も、時が経つにつれて意識が低くなってしまったり、不安が高まることが考えられる。こうした内定獲得後の就職不安については、就職活動中に情報探索を多く行ったうえで、入社前研修に参加することが、内定獲得後の就職不安を低減できるという結果であった。では、職業選択を行ってから入社するまでの期間の差は就職不安に影響があるのだろうか。また、職業を選択することに対する不安の違いは見られるのか。

就職活動について浦上(1996)は、「就職活動期間は自分を見つめる機会であり、さらに自分というものをさらに伸ばさせていこうとする自己成長を高める機会である」としている。また、自己成長力の変化は就職活動によって影響を受ける。より積極的な就職活動を行い、何度も吟味する者ほど自己成長力が增大するといえる。本研究では、就職活動を行った学生と、就職活動を行っていない学生の比較を行うことで、就職活動による効果についても検討していく。

既存研究の検討を通じて、以下に今回の分析課題を整理する。

- ・職業選択時期によって、自身が持つ将来の選択肢の数に対する考えに違いが見られるのか。
- ・職業選択時期によって、職業選択に対する不安の違いは生まれるのか。
- ・就職活動を行った学生と行っていない学生にはどのような違いが見られるのか。

Ⅲ. 調査方法

1. 調査概要

本研究では、上述した問題意識に基づいて対象者に半構造化インタビューを行った。調査期間は、2016年8月25日から2016年9月24日である。調査対象者は、(1)大学入学前に職業を選択した学生(医療・教育系)、(2)就職活動を行った学生(文系学部)、(3)公務員志望の学生、(4)大学院に進学する学生の4タイプに対し、各4名の計16名で、全て大学4年生である。大学入学前に職業を選択した学生の中で医療・教育系の学部に進学した学生を選抜した理由は、本研究が大学4年生を対象としたものであり、四年制大学の学部の中で職業と直結する学部は医療・教育系であると考えたからである。また、就職活動を行った学生は、文系学部に在籍する学生のみとした。これは、理系学部に進学する学生の就職活動は、依然として研究室推薦で就職する者が多いことから、文系学部に進

表 1 回答者データ

		性別	日程	インタビュー時間	就職先
①医療・教育系	A	女	9月3日	0:43:30	幼稚園
	B	男	9月20日	0:40:05	放射線技師
	C	男	9月20日	0:30:07	理学療法士
	D	女	9月23日	0:31:09	教師
②就職活動を行った学生	E	女	8月25日	0:59:24	医療系メーカー
	F	男	9月10日	0:39:34	IT
	G	男	9月24日	0:34:40	リース
	H	女	9月24日	0:40:20	小売
③公務員	I	男	9月7日	0:42:25	公務員(地方公務員)
	J	女	9月17日	0:44:31	公務員(国家公務員)
	K	女	9月23日	0:31:19	公務員(地方公務員)
	L	女	9月23日	0:31:59	公務員(国家公務員)
④大学院に進学する学生	M	男	9月9日	0:38:50	内部進学
	N	男	9月10日	0:22:37	外部進学
	O	女	9月19日	0:36:01	内部進学
	P	男	9月19日	0:24:32	内部進学
				計 9:51:03	

2. インタビュー質問項目

職業選択プロセスについて重点的に半構造化インタビューを行った。インタビュー質問項目は以下である。

- ①大学選択の過程— (1) 大学選択までの経緯
 (2) 大学を選ぶ際に将来の職業について考えていたか
- ②職業選択の過程— (1) 職業選択に関する不安
 (2) 親の職業の影響
 (3) 職業選択に費やした期間
 (4) 職業選択時期に考えた業界数
 (5) 最終的に職業選択をした決め手
 (6) 自身の将来の選択肢の数
 (7) 考えの変化
 (8) 職業選択時期に対する満足度
- ③職業選択をしたその後— (1) 自身の選択にどれだけ満足しているか
 (2) 転職の可能性

3. アンケート質問項目

インタビュー対象者には、インタビュー開始前に以下の項目についてアンケートに回答してもらった。

- ①回答者属性— (1) 学部・学科
 (2) 就職先業界、就職先決定時期

(3) 説明会に参加した企業数、選考を受けた企業数(就職活動を行った学生限定)

②職業選択不安(松田・永作・新井, 2008)

就職活動前から比較的長い間蓄積される職業を選択することから生じる不安である。本研究では、対象を就職活動者に限定しない松田・永作・新井(2008)の尺度を使用することとした。職業選択不安は以下の4つの下位概念から成る。

- (1) 自己理解不安…自分についての理解に関する不安
- (2) 職業移行不安…職業への移行に関する不安
- (3) 職業理解不安…職業についての理解に関する不安
- (4) 決定方略不安…職業を決めていくことに関する不安

③キャリアアンカー(Schein, 1978)

キャリア選択を促進、あるいは制約する自己概念で、キャリア志向のひとつのあらわれであるとされる。益田(2013)は、「何ができるか、何をしたいか、何をすべきか、に関する自己認識に対応するものであり、しかも観念的に形成されたものではなく実体験に根ざして自覚されたものである」としている。そのため、これまでの経験を踏まえた将来に対する考えを問うのに適していると考えられる。キャリアアンカーは以下の5つの下位概念から成る。

- (1) 管理的志向…人を管理することに興味を持ち、限りなく昇進していきたいと願うキャリア志向。
- (2) 安定的志向…安定感、安心感をキャリア選択のときの基準とする志向。
- (3) 専門的志向…専門性の高い仕事の才能があり、その仕事が好きでその分野で能力を高めていきたいと願うキャリア志向。
- (4) 自律的志向…自分のやり方、自分のペース、自分の基準で仕事をしたいと思うキャリア志向。
- (5) 創造的志向…創造性を重視し、自力で生き抜くことができるような事業を創始し成功させることに満足感を感じるキャリア志向。自分ならではのやり方にこだわる。

4. 職業選択時期の定義

本研究では、職業選択の時期を“職業を選択し、行動に移した時期”と捉える。(1) 大学入学前に職業を選択した学生は入学する大学を決定した時期、(2) 就職活動を行った学生や(4) 大学院に進学する学生(大学院進学後就職活動を行う学生)は内定を承諾し入社する企業を決定した時期、(3) 公務員志望の学生は公務員試験勉強を開始した時期とする。このように、職業選択の時期を将来の職業について考えただけでなく、行動に移した時期とすることで、より個人の決断を明確に判断できると考えた。

IV. 発見事実

1. 職業について考える期間の違い

インタビューの結果、職業選択が迫られる時期が異なることによって、将来の職業について考え始める時期が異なることが分かった。大学入学前に職業を選択している学生(医療・教育系)は、入学する大学を考える時点で将来の職業についても考え、一方就職活動を行った学生は、就職活動を開始する時期(大学2年～大学3年3月)に将来の職業について考え始めている。また公務員志望の学生は、大学3年4月頃に公務員試験勉強を開始しており、試験勉強を開始し始めてから公務員志望度が高まった学生が多い。大学院に進学する学生については、大学院選択が迫られる時期(大学3年の後期)に

将来の職業について考える学生が多い。これは、大学院で学ぶ内容と職業を直結して考えていることや、大学院に進学せずに就職活動を始めると悩む学生がいるからである。このように、将来の職業について考え始めてから実際に就職するまでの期間には差が生じている。また、大学入学前に職業を選択した学生は、大学在学中に就職活動を行い一般企業に就職することを考えた学生もいた。

萩原・櫻井(2008)は、大学生の職業選択に関連すると考えられる“やりたいこと探し”に対する動機尺度を自己決定性の観点から明らかにしており、自己決定性の高いものから順に「自己充足志向」「社会的安定希求」「他者追随」とした。本研究ではやりたいこと探しの自己決定性には、将来の職業について考え始めてから実際に職業に就くまでの期間が関係しているのではないかと考える。

大学入学前に職業を選択した学生や大学院に進学する学生の中には、小さい頃からのやりたいことを職業に結びつけている学生や、自分の興味のある分野における専門性を高め、将来の職業と結びつけて考えている学生がいる。これらの学生は、将来の職業について考え始めてから職業に就くまでの期間が長い。一方、就職活動を行った学生では、就職活動を機に将来の職業について考えている学生が多いため、将来の職業について考え始めてから職業に就くまでの期間は短い。

より高い自己決定性からやりたいことを考えているのは、将来の職業について考え始めてから職業に就くまでの期間が長い学生ではないだろうか。就職活動という機会が迫ってきているからやりたいことを“探さなければならない”と感じてしまう学生は、自己決定性が低いと考える。

このように、やりたいこと探しにおける動機の自己決定性を、将来の職業について考え始めた時期から職業に就くまでの期間の長さによって比較することが、今後の研究で求められると考える。

図 1 大学入学前に職業を選択した学生(医療・教育系) 時系列

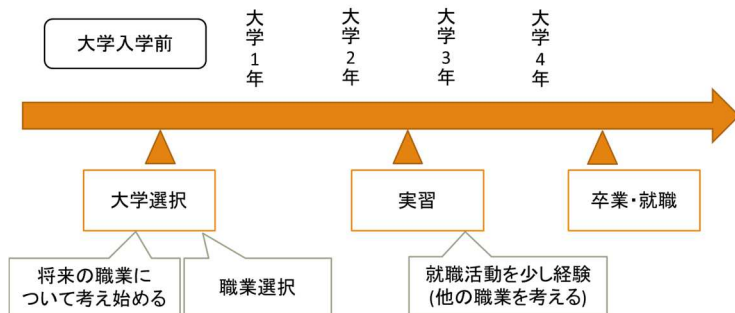


図 2 就職活動を行った学生 時系列

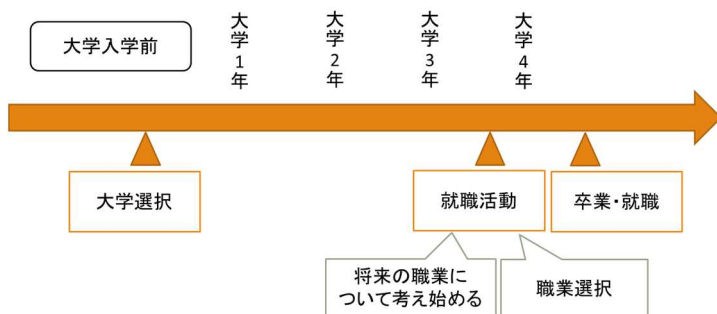


図 3 公務員志望の学生 時系列

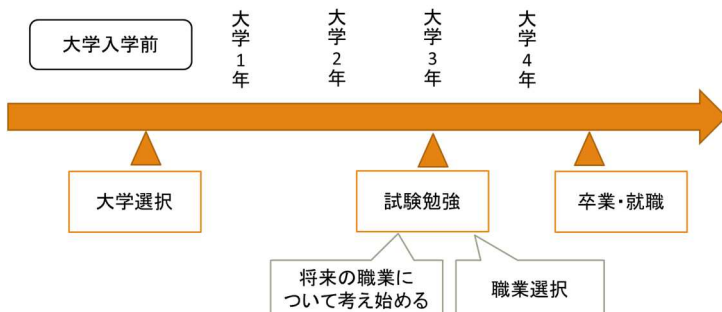
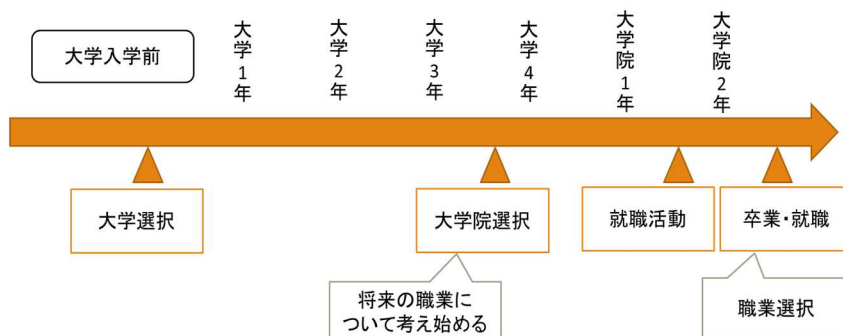


図 4 大学院に進学する学生 時系列

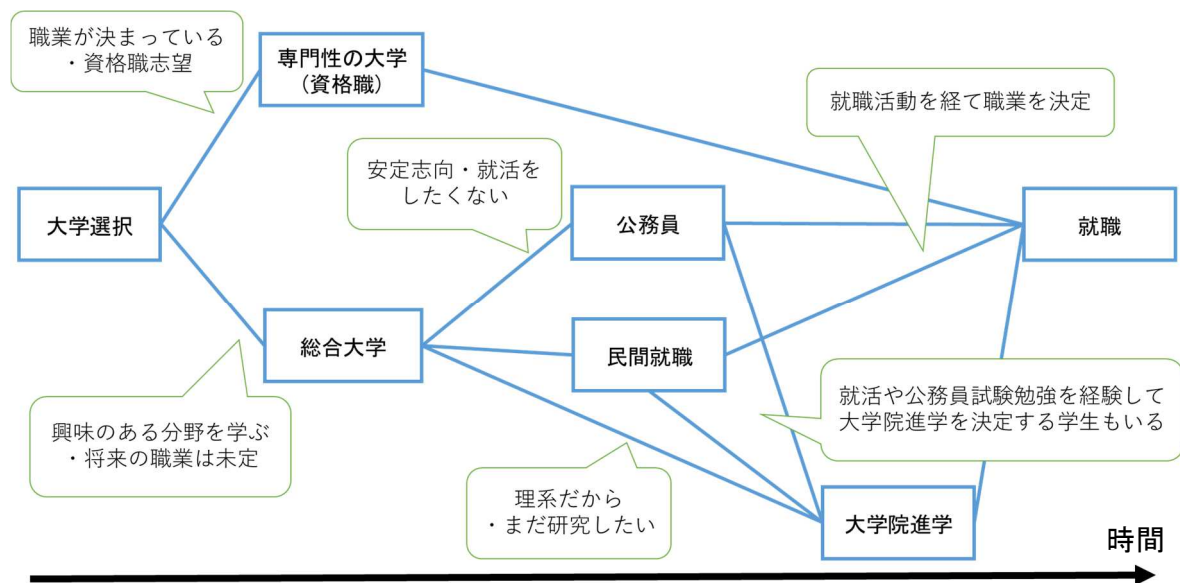


2. 将来の選択肢の数

職業選択において、その選択肢の数というのは重要な要因の1つであろう。前述したように、「何らかの意味で良い職業選択を行おうとするならば、大学生の就職活動ではかなりの数の企業を多くの選択基準で比較検討する膨大な情報処理が必要となる」からである(下村, 1998)。

まず、大学入学から就職に至るまで、どういった選択肢が存在するのか。図5はインタビューより、大学選択から最終的に就職するまでの過程での選択の分岐を示したものである。図5を見ると、専門性の高い大学を選択した学生は、その後新たな選択を行う機会はなく就職するという流れが多く、それ以降の選択肢はなくなる。一方、民間企業への就職活動を行うことを選択した学生は、その後の就職活動において職業の選択肢は数多くある。

図5 大学選択から就職までの選択肢



では、実際に学生は自身の将来の選択肢をどのように感じているのか。以下に各タイプが自身の選択肢についてどのように考えているかをまとめた。

(1) 大学入学前に職業を選択した学生(医療・教育系)

他の職業の選択肢を考えていない学生が多く、選択肢が少ないという意見もあった。

「（選択肢は）少なかつたかな。もう教師しか見ていなかったら。教師になりたいって周りにもずっと言ってきたし、周りも教師が向いていると言ってくれたから。だから他は見なかったのかな。」(Dさん 就職先：学校/教師)

「保育の道でも色々あるし、保育園、幼稚園、養護学校、児童館の先生とかも。最初は選択肢が狭いとかは考えなかった。他の職業に興味があったわけではないし。」(Aさん 就職先：幼稚園)

(2) 就職活動を行った学生

就職活動において業界を絞って進めていく学生や、最初は全ての業界を一通り考える学生などによって考える選択肢の数には幅があったが、選択肢は多いという意見が多かった。

「（選択肢は）多すぎて困った。業界の事は分かっていなかったし。親からこうなりなさいとも言われなかったし。業界地図を見て、業界がすごくたくさんあって、もうどう選べばいいかわからなくて。最初のうちは年収ランキングとかを見て、1 位を受けようとかそんな感じ。最初は適性サイトとかをたくさん見ていた。」（G さん 就職先：リース）

「私は、絞っていたから、周りよりは（選択肢は）少なかったかな。受けている数も少ないし。自分がやりたいことがしたくて。それでどんどん絞っていったから。後悔はしていないけど、もっと広く見ていたら、1 つの製品にもパッケージだったり広告だったりたくさんの企業が関わっているから、そういうところにも目が向けられてたのかなとは思う。」（H さん 就職先：小売）

「たくさん説明会に行って、たくさん受けた。全く興味のない会社の説明会にも行って、やっぱり興味がないなと思って候補から削ったところもあるし。だから（選択肢は）多いとは感じていた。たくさんの中から選んだなどは思っている。最初から絞った方がいいとも思っていたけど、選考を受けるうちに、興味がない業界でも人が良いなと思ってこの会社良いかもと思ったところもあるし。」（E さん 就職先：医療系メーカー）

(3) 公務員志望の学生

公務員の種類が本人達の予想より多くあったことから選択肢は多く感じたという意見もあったが、民間企業への就職と比較すると選択肢は少ないという意見もあった。

「思っていたよりは選択肢は多かったと思う。国家公務員に受かったら、その中で省庁を選べたりするし。」（I さん 就職先：地方公務員）

「民間を考えていない時点で、（選択肢は）狭いと思う。勉強でいっぱいいっぱい民間との両立はできなかった。」（J さん 就職先：国家公務員）

「省庁決めの時にすごく迷ったけど、迷う選択肢を考えたら少なかったのかな。」（L さん 就職先：国家公務員）

(4) 大学院に進学する学生

将来の選択肢について少ないと考えながらも、否定的な意見は特になかった。

「（選択肢は）少ないかな。建築に進んだら、ゼネコンとか設計とか。大手ゼネコンって 5 社だけだし。別に選択肢が少ないから悪い、良い、は考えなかったかな。その中に自分の進みたい道があるし。」（N さん 大学院：外部進学）

「(選択肢は)結構知らぬ間に絞っていた感じだからな。就活する時も情報通信系しか受けないともう決めているし。」(Pさん 大学院：内部進学)

このように、将来の選択肢についての考えは、第一に何と比較するかによって選択肢の多寡は変わること、第二に本人が自身の持つ選択肢について気が付いていない場合があることが挙げられる。公務員志望のJさんが、民間企業に就職をする学生と比較して選択肢が少ないと発言している一方、同じく公務員志望のIさんは、本人が当初想定していた選択肢と比べて多いと発言している。また、他人との比較を行わない学生にとっては、自身の考える選択肢の中に、将来進みたい道があれば選択肢の多寡は気にならないようだ。こうした比較する対象の違いや有無によって、本人が感じる選択肢の多寡は変化する。また、大学入学前に職業を選択した学生は、職業を絞って考えている学生が多い。当初から選択肢を絞ることで、他の選択肢に気が付かずに選択を行うことも考えられる。

3. 考えの変化

対象者へのインタビューの中で、自身が職業選択を行う過程や行った後での考えの変化について尋ねた。大学入学前に職業を選択した学生の中には、大学入学後に違う職業を考えた学生もいた。

「本当にこのまま保育の道に進んでいいのかと悩んだ。もっといい職があるんじゃないかなって。普通に一般企業に就職して、9時から17時で働きたいなと思って。それで就活をすることにした。同じ保育学科の中にも、一般企業の就活をしていた人がいて、そういう人たちといると、どんどん保育の悪い面しか見えなくなっていく。でも、就活は、自分がいいなと思った会社に、いざエントリーシートを書こうとなった時、本当にその(受ける会社の)仕事をやりたいのかなと考えたら、そうでもないなって気づいた。自分がいいなと思った会社でその感情ということは、他もいいと思えないと感じて、一気に就活を辞めた。」(Aさん 就職先：幼稚園)

Aさんは他の職業に就くことを考え就職活動を行ったが、就職活動を通して一般企業に就職して働くことは、自分がやりたい仕事ではないと実感している。大学入学前に職業を選択した学生の中には、他にも就職活動をすればよかったと話していた学生がいた。しかし、実習期間などにより就職活動との両立が難しく、Aさん以外は一般企業の就職活動は行っていない。就職活動などを通して他の職業について考えることで、さらに自身の選択に対する納得性を向上させることができるのだろう。大学入学前に職業を選択した学生は、将来“なりたい”職業であったはずが、大学在学中に、将来“なる”職業へと変化し、より現実的になることで、他の選択肢はないかと悩む時期があると考えられる。

また、就職活動を行った学生は、就職活動期間の中での考えが変化する者もいた。

「最初は、みんなが知っている会社がいいとか、バリバリ働きたい、起業したい、自由に働きたいとか、そんなことばかり考えていた。でも最終的には、将来の事を考えて安定志向になった。結局何のために働くのかってなった時、家計を支えるためだと思って。もう会社の歯車になってやろうという気持ち。だから、就活をしていく中で大幅に自分の考えは変わった。誰かの影響を受けたとかではなくて、就活をしていく中で自然と変わっていった気がする。」(Fさん 就職先：IT)

Fさんは、就職活動を始める時点では将来の事について漠然と考えていたが、職業選択の決断が迫られるにつれてより具体的に考えるようになった。そして最終的な候補となった会社の中で比較を行う際に、自分がその会社でどのように働くのか、加えてどのような生活を送りたいのかを考えた結果、当初描いていたキャリアプランとは異なる選択を行った。こうした就職活動期間中の考えの変化に応じて、進路の変更が可能である点は就職活動を行った学生の特徴である。

このように、就職活動を経て職業選択を行った学生は、就職活動期間中に自身のキャリアプランを考え、最終的な職業を選択している。就職活動が彼・彼女らの職業に対する考えの変化や明確化に影響していると言える。これは、就職活動の内容が自己の成長に関係しているという浦上(1996)の研究結果と一致するものである。

4. 職業選択時期に対する満足度

対象者へのインタビュー調査の結果、職業選択時期に対する満足度や考え方に差が見られた。

(1) 大学入学前に職業選択をした学生(医療・教育系)

自身の職業選択時期については、早いと回答した学生が多かった(4人中3名)。しかしながら、専門性の高い大学で学ぶことが求められる資格職であるために、自身の職業選択時期が早いことに関しては「仕方ない」という意見もあった。

「早かったと思う。名の通っている大学に行った方が、将来の選択肢は多いということを知校の時知らなかった。ただ資格職ばかりみていたな。でも、大学3、4年で幼稚園の先生になりたいと思ってももう遅いから仕方ないけど。」(Aさん 就職先：幼稚園)

「高2で決めたのはちょっと遅かったかも。自分の向く先がスポーツしかなかったから(もっと早く決めることができた)。でも、文系だったらもっと(選択の時期が)遅くても選択の幅が多くなる。難しい。高校の頃はいいアイデアもないし、大学3年になってからきちんと考えた方がいい道を選べたのかも。そう考えたら高2は早かったかな。」(Bさん 就職先：病院/放射線技師)

「早かったかな。他の職業についてあまり知らないうちに決めちゃったから。就活のセミナーにも参加すればよかったかも。教師って本当に狭い世界で、その上で生徒に偉そうなことを言うのに、自分たち(教師自身)は外に出ていないから。それは悔やんでいるかな。」(Dさん 就職先：学校/教師)

(2) 就職活動を行った学生

職業を考える時期については、全ての学生において遅くもなく早くもない、ちょうど良いという意見であった。また、就職活動以前に将来の職業について考えていた学生は少ないことから、就職活動をきっかけとして将来の職業について考える学生が多いと判断できる。高校時代に大学や専攻を決める上での選択基準として、自分が将来どのように働くかを想定している学生はいるものの、具体的に決めている学生はいなかった。

「職業を選択するタイミングは良かったと思う。4年生は卒論で忙しい。2年生は早すぎる。1、2年の頃は将来の事なんて考えなかったから。3年生なら決まってもまだ1年(大学生活がある。考え直しもできる時期。3年生の後期からでもいいんじゃないかな。そしたら3年生の間に決まるし。」(Eさん 就職先：医療品メーカー)

「就活を経てから職業を決める方がいいと思う。大学生活をある程度経験してから。このタイミングが良いな。みんな自分がやりたいことではなくて、自分にやれることを消去法で選んでいる気がする。だけど、もっと色々なことを経験すればその感情をなくせるんじゃないかな。」(Fさん 就職先：IT)

「遅いとは思わなかったけど。将来の事を考え始めたのは3年になってからだから、就活というのがあって、職業を探さないという感じ。」(Hさん 就職先：小売)

(3) 公務員志望の学生

公務員試験勉強を始める時期を職業選択の時期と考えていない学生もいたことから、明確に意識した時期がない可能性も高い。今回調査した公務員志望の学生全員が、公務員試験の勉強は予備校入学を機に開始している。

しかし、試験勉強が主であることから実際に働くイメージは少なく、予備校に入学した時点では将来自身が公務員になることへの結びつきは少なかったと考えられる。また、就職活動前に公務員試験の勉強を始めたことに関しては、その決断に納得している学生が多い。

「早く決めておいてよかったな。私の性格上、決めていないと多分全然勉強していなかったと思う。そしたら間に合っていないし。勉強を始めただけで、公務員に決めたという感覚ではなかったから。そんなに深く考えていなかったかな。だからそんなに早いとは思わなかった。(就職活動の)時期が今と違っても、就活はしていなかったかな。」(Kさん 就職先：地方公務員)

「ちょうどよかったのかな。予備校自体には、もっと早くから通うプランもあるけど、多分その時から勉強していたら、モチベーションは維持できていなかっただろうし。(試験勉強を始める時期は)1年前くらいがちょうどよかったのかな。民間企業は見ずに選んだけど、自分が第一志望に受かったから今はそれでよかったのかなという感じ。3年は週2くらいしか授業がなくなって暇になるのが自分にとって嫌で。それで勉強しようという感じで予備校に通い始めたから。そんなに悩まずに決めてしまったかな。」(Lさん 就職先：国家公務員)

(4) 大学院に進学する学生

働く時期については遅いとしながらも、ある程度の職業はすでに考えているため、職業選択の時期については遅いとは感じていない学生が多かった。

「ちょうどよい。これ以上先延ばしも違うし、それよりも早いと自分には早すぎる。今

は、その時(最終的に職業を決める時)までに誇れるような武器が欲しいからスキルを伸ばしたい。もっと学びたい。」(Mさん 大学院：内部進学)

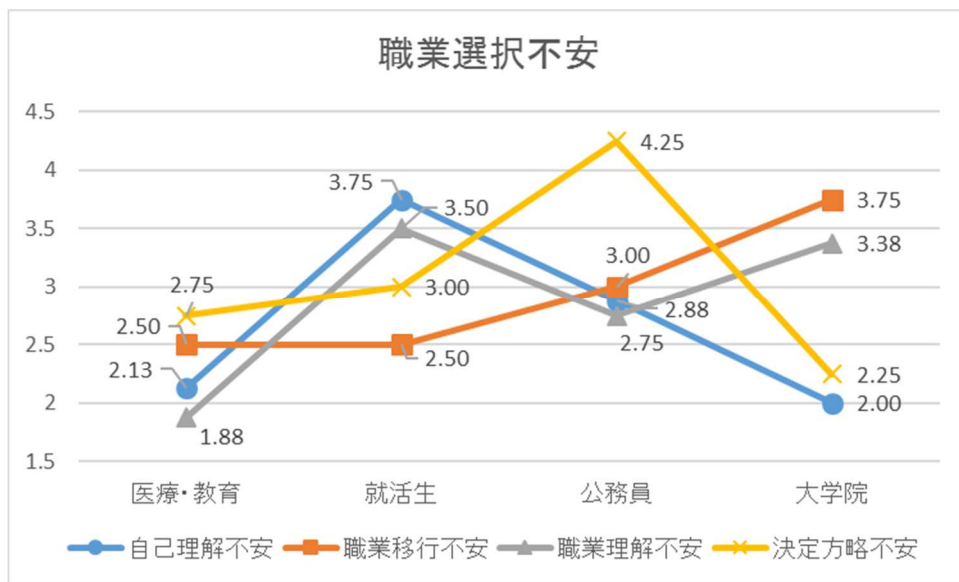
表 2 職業選択の時期に対する考え方の比較

	職業選択の時期	職業について考える期間	将来の選択肢の数	職業選択時期に対する考え	
①医療・教育	大学入学前	長い	少ない	早い	その職業に就くなら仕方ない
②就活生	大学4年	短い	多い	ちょうど良い	自身の就活開始時期については遅かったとの意見もあり
③公務員	大学2・3年	短い	少ない	ちょうど良い	試験勉強開始を職業選択時期と捉えていない学生もいる
④大学院	大学院進学後	長い	少ない	ちょうど良い	働く時期は遅い

5. 職業選択不安

本研究では、松田・永作・新井(2008)における職業選択不安尺度を使用した。その下位概念は、自己理解不安・職業移行不安・職業理解不安・決定方略不安の4つである。大学院に進学する学生に関しては、今後職業を選択することに関してどのように感じているか、その他の学生には、職業を選択した際にどのように感じていたかについて、1点(最もあてはまらない)から5点(最も当てはまる)で回答してもらった。点数が5点に近い方が、不安が大きいとする尺度である。全体を通して、大学入学前に職業を選択した学生の職業選択不安は低かった。また、就職活動を行った学生、公務員志望の学生、大学院に進学する学生は、下位概念ごとに不安の高低が異なる結果となった。なお、男女間での差は見られず、就職活動の有無で比較した結果は、自己理解不安のみ差が大きいという結果であった。図6にタイプ別の職業選択不安の数値比較を示す。

図 6 職業選択不安の比較



(1) 自己理解不安…自分についての理解に関する不安

就職活動を行った学生が平均 3.75 と最も高い。このタイプの学生は、就職活動を前にして初めて本格的に自身の職業について考えた学生が多いことから、自分のやりたいことや興味が分からず、不安

に感じていたと考えられる。また、大学入学前に職業を選択した学生は平均 2.13、大学院に進学する学生は平均 2.00 と数値が低い。これらのタイプの学生は、興味・関心のある分野について学んでいることや、学んでいる内容が将来の職業につながっているため、自分が何をやりたいのか分からない、自分が何に興味を持っているのか分からないといった不安は低くなっているのだろう。

(2) 職業移行不安…職業への移行に関する不安

大学院に進む学生が平均 3.75 と最も高い。これは、このタイプの学生がインタビューの際に、社会人として働いていく自信がないと回答したことと一致する結果である。しかし、どの学生も自分のスキルがまだ足りていないと考えていることが不安につながっているため、大学院で専門性の高いスキルを身に着けることで、実際に職業を選択する際にはこの不安が低くなっていると予想できる。

「(働き始める時期は)遅いな。学部生はもう就職するし。実力がないうちは、自信もないから働きたいとは思わないけど。他の人たちが働くところで自分は遅いなと。」

(Nさん 大学院：外部進学)

「大学院は最初から行くつもりだった。とりあえず、理系は院に行くのが当たり前なのかなと思ってたから。それに、4年で卒業して仕事に就いても自分に能力がないから(4年で卒業して)働くのは無理だと思っていた。」(Pさん 大学院：内部進学)

一方、大学入学前に職業を選択した学生は、平均 2.50 と数値が低い。このタイプの学生は、大学在学中の実習等を通して将来自分がどのように働くかある程度把握できていることから、不安が少ないと考えられる。また、同様に就職活動を行った学生も職業移行不安は低いが、これは就職活動を通して実際に社会人と触れ合う機会が多く、自分が社会人として働くイメージがついたのではないかと考えられる。このように、社会人と触れ合う機会の多い医療・教育系や就職活動を行った学生は、職業移行不安が低い。

(3) 職業理解不安…職業についての理解に関する不安

就職活動を行った学生が平均 3.50 と最も高い。これは前述したように、就職活動では選択肢となる業界や企業が多く全ての情報を網羅し理解することは難しいことから、職業理解不安を抱いていたと考えられる。また、業界や企業に関する知識は、就職活動開始の時期とも関連する。就職活動開始時期が遅い学生は、十分な業界分析を行えずに職業選択が迫られてしまう。

「メーカー、IT、リースを見ていた感じ。他を見たら(就職活動が)終わらないかなと思ってもう絞っていた。その時に、もっと前から(就職活動を)始めればよかったなと思った。せめて自分の興味のある業界とかの知識は得とくべきだったな。」(Gさん 就職先：リース)

一方、大学入学前に職業を選択した学生は、平均 1.88 と数値が低い。このタイプの学生は、大学在学中の講義や実習を通して職業への理解が高まったと考えられる。

「(実習の内容は)最初は、先生と一緒にクラスに入り、各クラスに行ってみ学のような感じ。進行は先生で、補助を自分がする。3年の実習の時の幼稚園は、たくさん自分で

やらせてもらった。例えば、帰りに行うゲームを自分で進めてみる日や、朝の会を自分で進める日があった。ほぼ毎日、何かしら部分的なことをやらせてもらっていた。バスの添乗以外は先生と同じ仕事をしているという感覚。実習を経験すると、将来自分が働く姿を想像しやすい。働く内容も分かる。先生方のテクニックを日々学ぶという感覚。将来の練習の場。」(Aさん 就職先：幼稚園)

また、職業に関する理解に関しては、職業について考える期間も重要な要因だろう。就職活動を行った学生は、就職活動の期間に職業について調べて学ぶが、大学入学前に職業を選択した学生は、大学4年間を通してその職業について向き合い、学ぶ。このように職業について考える期間の違いは、職業理解不安の高低の規定要因の1つであると考えられる。大学院に進学する学生は、専門性を高めているという点で職業理解不安が低い結果になると予想していたが、今回の結果では職業理解不安が筆者の予想より高い結果であった。これは、大学院を修了後に就職活動を控えている学生として、業界や企業に関する知識がまだ少ないためであると考えられる。そのため、就職活動を行った学生と同様のスコアが得られたのだろう。

(4) 決定方略不安…職業を決めていくことに関する不安

大学院に進む学生が、平均 2.25 と数値が低い。このタイプの学生は、大学院に進学し研究をする内容に付随して将来就きたいと考えている職業がある程度決まっていることから、職業を決定することに対する不安は低いと考える。一方、公務員志望の学生が平均 4.25 と数値が高い。このタイプの学生の特徴として、公務員になるということは決まっているものの、地方公務員や国家公務員、またその中の省庁などといった種類までは決めずに、最終的に受かってから判断する学生が多くいた。このことから、最終的に1つに決断する際に迷いがあったと考えられる。

「最初は、県庁か市役所が良かったけど、東京に来てからは、東京でもいいかなと思った。受かれば何でも良い。(試験の)日程がかぶっていなければ何でも受けることができるし。」(Iさん 就職先：地方公務員)

「最初から受けるところを決めていたわけではない。3年の1月に試験日程が出るからそこで受けるところを決めた。日程がかぶっていたところは、4月の締め切りまで悩んでいた。受かった後も、ぎりぎりまでどこに行くか悩んでいた。」(Jさん 就職先：国家公務員)

6. キャリアアンカー

管理的志向、安定的志向、専門的志向、自律的志向、創造的志向の5つの志向について、1点(最もあてはまらない)から5点(最も当てはまる)で回答してもらった。

ほぼ全ての志向において、公務員志望の学生がその他のタイプの学生と比べて最も数値が低かった。この結果から、公務員志望の学生はまだ自身のキャリアが定まっていないと考えられる。公務員志望の学生は、試験勉強を進める中で、民間企業への就職は考えなくなり(当初から公務員に絞っている学生もいるが)「試験に受かればよい」という考えに至ってしまう。試験勉強から試験に合格するまでの間に、自身がどのように働いていくかに関するキャリアプランはそれほど考えない。そして前述したように、最終的な就職先は試験に合格した後に決める学生が多い。そのため、キャリア志向が低いと

いう結果になったと考えられる。

職業選択を終えた時期にも関わらず自身のキャリアが定まっていないことは、今後働き始めてからの働き方について何を重視すれば良いか分からないため、仕事に対するモチベーションを維持することや、長く働き続けることへの障害となりかねない。公務員志望の学生自身が、試験に合格することを最終目標と捉えるのではなく、どのような仕事をしたいのか、どのように働いていきたいのかについて自身の考えを明確化することを第一に優先するべきである。また、公務員志望の学生に対しても、早期から公務員の仕事内容に関する説明や社会人との触れ合いの場を多く提供し、自身のキャリアについて考える機会を増やすべきであると考えられる。

V. 考察・まとめ

本稿では、職業選択時期の違いによって大学4年生をタイプ分けし、タイプごとに比較を行ってきた。本研究を通して職業選択時期の違いによって、職業選択時期に対する満足度や、自身の将来の選択肢の数に対する考えに差が見られた他、やりたいこと探しにおける動機づけの自己決定性や、職業選択不安、キャリアアンカーにおいて、職業選択時期が規定要因の1つとなることが示された。

前述した今回の分析課題は以下である。

- ・職業選択時期によって、自身が持つ将来の選択肢の数に対する考えに違いが見られるのか。
- ・職業選択時期によって、職業選択に対する不安に違いは生まれるのか。
- ・就職活動を行った学生と行っていない学生にはどのような違いが見られるのか。

職業選択時期によって自身の将来の選択肢の数に対する考えには違いが見られたものの、選択肢の数に対しての肯定的・否定的な考えはあまり見られなかった。しかし、大学入学前に職業選択を行った学生に関して、就職活動を行えばよかったという意見があったことや実際に就職活動を行った学生がいたことは、自身の選択肢を広げようとしていたとも考えられる。また、今回のインタビュー対象者全体の特徴として他人との比較を行う学生が少なかったことが挙げられる。よって、他の学生と比較して選択肢が多いから良い、少ないから悪いといった意見が少なかったと考えられる。

職業選択不安についても、職業選択時期によって違いが見られた。大学入学前に職業を選択した学生は、大学在学中に職業について専門知識を身に着け実習等を経験するため、職業選択不安はその他のタイプに比べて低かった。就職活動を行った学生は、職業移行不安のみが他のタイプと比べて低かったものの、その他の職業選択不安は高かった。これは、将来の職業について考え始める時期が就職活動を開始する時期であり、職業について学ぶ期間が短く、その短い期間の中で職業選択が迫られるため、不安の高まりにつながったと考えられる。このように、職業について考える期間が、職業選択不安において重要な要因の1つであるといえる。

本稿では、就職活動を行った学生と、就職活動を行っていない学生を比較することで、就職活動の効果を探ることも目的の1つとしていた。就職活動を行った学生の特徴として、就職活動期間に自身の考えが変化したことや、将来の仕事に対する意識が高まったことが挙げられる。公務員志望の学生のキャリアアンカーが低かったことと比べ、就職活動を行った学生は、自分の今後の働き方について具体的な考えが見られた。

「その部門だけができるからこの会社を選んだ。ジョブローテーションはない。1つ

の仕事を極めて、プロフェッショナルとして働きたい。1つの仕事を専門的に極めて働いていきたいという考えは、就活中に思った。ジョブローテーションが多い会社にはあまり魅力を感じない。こんなに覚えたのになぜまた違う仕事をするのかわからない。それよりは、1つの仕事を極めたい。」(Eさん 就職先：医療系メーカー)

「最初は、転職したいなという気持ちはあったけど、今は、この会社でどうキャリアアップするかを考えるようになった。」最初は店舗配属で、いずれ店長になって、その後エリアマネージャーになって、本社で働くというイメージ。あとは、最初は、裏方で店舗をまとめる仕事がやりたいと思っていたりもしたけど、これから新卒入社の人が増えていくから、その人たちをトレーニングしたいなと思いはじめた。人材育成に携わってみたいなど。」(Hさん 就職先：小売)

Eさんは、就職活動を通して自身の働き方について自分がやりたい仕事をし続けたいと考えた。そのため、ジョブローテーションなどによってやりたい仕事ができなくなることは嫌だと考え、1つの仕事を専門的に極めることができる会社を選んだ。就職活動を通じた職業選択においては、多くの選択肢から最終的に1社を決める過程で、個人の異なる価値観や選択基準に基づいて職業を選択できる。一方Hさんは、職業選択を行った後に、自身の今後の働き方について考えの変化が見られたと発言している。最終的に会社を選択した決め手として、「新卒の伸びしろを見てくれているところに惹かれた」と発言していた。そうした選考過程で感じた思いから、自身も新卒社員の育成に携わりたいという考えが芽生えたと考えられる。

就職活動を行った学生が、自身のキャリアプランについて、より具体的に考えていることは社会人と接する機会の多さにも関係するだろう。大学入学前に職業を選択した学生も、実習を通して社会人と触れ合う機会はあるものの、その業界の社会人に限られる。公務員志望の学生も同様である。一方、就職活動を行った学生は、就職活動期間に様々な業界で働く人と触れ合うことができる。そうした中でより幅広い視野を得ることによって、自身のキャリアが固まるのではないかと考える。

VI. インプリケーション

1. 学術的インプリケーション

これまで職業選択は、就職活動の内容等に焦点を当てた研究が数多くなされてきた。しかし、本研究では新たに職業選択時期の違いに着目した。本研究において、やりたいこと探しにおける動機の自己決定性や職業選択不安、キャリアアンカーは、職業選択の時期が規定要因となる可能性が高いことを示した。職業選択時期の違いから生じる将来の職業について考える期間の差によって、やりたいこと探しにおける動機の自己決定性が異なる。また、職業選択不安、キャリアアンカーが今回の調査対象である4タイプで違いが見られたことから、職業選択時期の違いが規定要因となっていると言える。

2. 実務的インプリケーション

本研究において、大学入学前に職業を選択した学生の中で、就職活動が実習により行えなかったという意見があった。大学入学前に職業を選択した学生は、早期に将来の選択肢が狭まることが考えられる。そのため、その他の職業との比較を行うことが難しい。十分な比較検討を行わずに職業を選択してしまうと、就職後のリアリティショックにつながる可能性がある。また本研究では、就職活動を通して様々な業界で働く社会人と触れ合い、視野が広がることで自身の将来に対する考えをより具体

化できることが示された。今後、専門性の高い大学に進学した学生に対しても、就職活動を行う機会の提供や、他の業界で働く人との交流を取り入れることが求められる。

また、就職活動を行った学生において、将来について考え始めてから職業選択が迫られる時期が短いために、職業に関する知識が足りないことから生じる不安や、自己理解に対する不安が高い数値で示された。他方で、公務員志望の学生が、民間企業の就職活動については詳しく知らないといったように、今回の4タイプに共通して、自分と違うタイプの職業に関してよくわからないと回答した学生が多かった。第一に、職業選択が迫られる最初の時期である大学選択の時点で、学校側が将来の職業に関する知識の提供をより豊富に行うことが求められる。第二に、学生自身が自身の将来就く職業だけではなく、その他の職業についても知識を身に付けようと活動する必要がある。就職活動の新卒一括採用が定着している現在において、最終的に職業を選択するタイミングは、就職活動を行う全ての学生においてほぼ同時期である。そのため、将来の職業について考え始めてから職業選択を行う期間をより長くし、職業選択に対する不安を軽減させるためには、将来の職業について考え始める時期を早くすることが求められる。専門性の高い高校では、高校生のインターンシップが積極的に行われている。高校の時点で、インターンシップのように社会に出る経験をすることは、自身の職業観について考える1つのきっかけとなるだろう。大学在学中の就職支援等はもちろんであるが、高校の時点から、学生に対して将来について考える機会を多く与えることが今後必要である。また、学生自身が、将来の職業を選択する際に十分な比較検討をする必要がある。学校側からの支援を積極的に活用することや、意識的に職業に関する知識を身に付けることで、より納得のいく職業選択を行うことができる。

Ⅶ. 研究の限界

本研究では、分析手法において、個人の職業選択プロセスについてより詳しく分析するため、また調査対象によって質問項目が多少異なるため、定性分析を用いた。しかし、定性分析の欠点として、サンプル数が少ないことが挙げられる。より多くの対象者にインタビューを行うことやアンケート調査を行うことで、より説得力の高い結果が導き出せるかもしれない。職業選択時期の違いによるタイプ分けについては、大学入学前に職業を選択した学生は、医療・教育系以外にもいることを考慮しなければならない。今回の調査対象者は大学4年生に統一していたが、今後、専門学校や短期大学に進学した学生も対象者に含め、比較を行う必要があるだろう。また、職業選択に対する満足度について問う場合は、実際に働いている社会人を対象とすると、より自身の職業選択が正しかったかを判断できると考えられる。

Ⅷ. 参考文献

- 藤井 義久(1999)「女子学生における就職不安に関する研究」『心理学研究』Vol. 70, No. 5 pp. 417-420.
- 萩原 俊彦・櫻井 茂男(2008)「“やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討—進路不決断に及ぼす影響の観点から—」『教育心理学研究』Vol. 56, No. 1 pp. 1-13.
- 益田 勉(2013)「「若者の安定志向」の心理学検討」『人間科学研究』Vol. 35, pp. 15-26.
- 松田 侑子・永作 稔・新井 邦二郎(2008)「職業選択不安尺度の作成」『筑波大学心理学研究』Vol. 36, pp. 67-74.
- 松田 侑子・永作 稔・新井 邦二郎(2010)「大学生の就職活動不安が就職活動に及ぼす影響」—コピーングに注目して—『心理学研究』Vol. 80, No. 6 pp. 512-519.

首都大学東京 西村孝史ゼミ 2016 年度卒業論文

Schein, E.H. (1978) *Career Dynamics, Matching Individual and Organizational Needs*, Reading, MA: Addison-Wesley.

下村 英雄(1996)「大学生の職業選択における情報探索方略—職業的意思決定理論によるアプローチ—」『教育心理学研究』Vol. 44, No. 2 pp. 145-155.

下村 英雄(1998)「大学生の職業選択における決定方略学習の効果」『教育心理学研究』Vol. 46, No. 2 pp. 193-202.

杉本 英晴(2007)「大学生の就職活動プロセスにおけるエントリー活動に関する縦断的検討」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学』Vol. 54, pp. 81-92.

浦上 昌則(1996)「就職活動を通しての自己成長 女子短大生の場合」『教育心理学研究』Vol. 44, No. 4 pp. 400-409.

矢崎 裕美子・斎藤 和志(2014)「就職活動中の情報探索行動および入社前研修が内定獲得後の就職不安低減に及ぼす影響」『実験社会心理学研究』Vol. 53, No. 2 pp. 131-140.

株式会社インテリジェンス「an 若年層白書 2014 年 4. いまの将来観」

URL:http://weban.jp/contents/wakamono/jakunen2014_pc/04/04.pdf

アクセス日：2016 年 11 月 22 日.

株式会社ライセンスアカデミー(2014)「進路情報研究センター調査レポート」Vol. 6.

URL:https://licenseacademy.jp/webroot/pdf/industry/pdf_indu_cent_140718.pdf

アクセス日：2016 年 11 月 22 日.

一般社団法人 日本経済団体連合会(2015)「採用選考に関する指針」

URL:https://www.keidanren.or.jp/policy/2015/112_shishin.pdf

アクセス日：2016 年 11 月 27 日.

文部科学省「学修成果の把握と学修成果の評価についての具体的方策に関する調査研究」報告書（平成 26 年 3 月）

URL:http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/_icsFiles/afieldfile/2014/07/17/1347643_01.pdf

アクセス日：2016 年 11 月 21 日.